

「ひとに出会う」を軸とした ESD 地域学習の創造

－ オンライン水俣ツアーの実践を通して －

佐竹靖

(奈良教育大学附属中学校)

渡邊伸一

(奈良教育大学 社会科教育講座 (社会学))

竹村景生

(天理大学 人間学部 総合教育研究センター)

大谷佳子・亀井朋也・新谷太一・中嶋たや・中村基一・挽地夕姫・吉田寛・若森達哉

(奈良教育大学附属中学校)

Creation of ESD Community Learning that Incorporates the Perspective of 'Meeting the People':
Case Study of "Online Minamata Tours"

Yasushi SATAKE

(Junior High School attached to Nara University of Education)

Shinichi WATANABE

(Department of Social Studies Education, Nara University of Education)

Kageki TAKEMURA

(Faculty of Human Studies, Tenri University)

Yoshiko OHTANI, Tomoya KAMEI, Taichi SHINTANI, Taya NAKAJIMA, Motokazu NAKAMURA

Yuuki HIKICHI, Hiroshi YOSHIDA, Tatsuya WAKAMORI

(Junior High School attached to Nara University of Education)

要旨：奈良教育大学附属中学校では、2021 年度の修学旅行において、新たに熊本県水俣市において人権・環境学習を軸とした ESD 地域学習を企画した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、最終的にはオンライン水俣ツアーとして実施することとなった。本実践は、様々な立場で水俣に暮らす人と出会い、その生き方や語り、地域との向き合い方から学ぶことを通して、生徒自身が自らの生き方を問い直すことをねらいとした。本研究では、事前学習を含めた一連の学習において、生徒に生じた学びや変容を分析し、今後の ESD 地域学習のあり方について、示唆を得ることを目的とした。分析の結果、多くの生徒が、身近な問題として水俣の問題を捉え、自分の考え方や生き方を変えようとするレベルで自分事化が図られたことが認められた。

キーワード：総合的な学習の時間 The Period for Integrated Studies

特別活動 Special Activities

水俣 Minamata

ESD (持続可能な開発のための教育) Education for Sustainable Development

修学旅行 School Excursion

自己変容 Self-transformation

はじめに

1. 1. 本研究の位置付けと ESD 地域学習の定義と意義

学校教育において地域学習は、社会科などの教科や総合的な学習の時間に身近な地域を対象に実施されることが多い。生徒にとって地元から学ぶことは、身近な地域

を知ることによって価値に気づき、郷土への愛着を持たせることにつながる。しかし、将来生徒が地域づくりの担い手になるためには、地域の問題を自分事として捉え、多様な視点から地域課題に向き合っていく必要がある。

奈良教育大学 ESD 書籍編集委員会 (2021) の中で、中澤は「ESD は、社会のあり方や自分と社会の関係についての価値観と行動の変革を促す教育である」と述べて

いる。このように、ESD の教育実践では、生徒の価値観の変容を促し、社会との関係性の中で自らの生き方の問い直しを生じさせることが重視される。さらに問い直しの結果、生徒が内発的に地域社会の問題や環境問題に、多様な視点から関わる力を養うことをねらいとしている。

そこで、本研究では、ESD の価値観を取り入れ、「ひとに出会うこと」を軸とした新たな地域学習を創造することにした。本研究の地域学習では、違う立場で地域に関わるひととの出会いや、その生き方や語り、地域との向き合い方から新たな価値観や生き方に迫らせる。さらに、そのひとが生きてきた時間的・空間的背景を共有してこそ、深い気づきが得られるものと考え、ひととの出会いを人と自然の営みを時間的・空間的に内包した地域のランドスケープ¹⁾の中に位置づける。本研究では、これを ESD 地域学習と定義した。

また、コロナ禍において、従来の地域学習の実施が困難な状況となっている。河本ほか(2021)では、COVID-19 禍をふまえた地域学習のあり方について検討している。河本は、オンライン環境を用いることにより、従来に比べて時間的・空間的・金銭的制約が軽減し、オンラインならではのひととの出会いや、協働・発表の機会の創出が可能となったと指摘している。本研究の地域学習においても、オンライン環境を駆使した実践となっており、今後のコロナ禍における地域学習のあり方への示唆も得られると考える。

1. 2. 研究の経緯

奈良教育大学附属中学校(以下、本校)は、2008 年にユネスコスクールに加盟し、ESD(持続可能な開発のための教育)の理念を取り入れた教育実践を行なってきた。現行のカリキュラムは、2018 年度から開始したカリキュラムマネジメントによって学校行事を編み直し、ESD 実践の再構成を行なったものである。その中で、「地域課題に向き合い、多様な視点から考え、持続可能な地域社会の形成者を育てること」を目標に定めた。具体的な実践としては、1、2 年生の「奈良めぐり」、2 年生の臨海実習、3 年生の修学旅行、卒業研究がある。奈良めぐりは地元の奈良を、臨海実習は三重県の伊勢を、修学旅行では沖縄を地域として学ぶ。「ひとに出会う」をコンセプトに、様々な立場で地域に暮らす人と出会い、その生き方や語り、地域との向き合い方から学び、自らの生き方を考える。そして 3 年間の集大成として卒業研究を位置付けている(詳細は吉田ほか 2020、佐竹 2021)。

本研究は、修学旅行における ESD を対象としている。これまで、本校の修学旅行は、平和学習を軸として沖縄で実施してきたが、新型コロナウイルス感染症の拡大により、行き先変更を余儀なくされた。そこで、行き先を熊本県水俣市に変更したが、更なる感染状況の悪化に伴い、道半ばでオンライン水俣ツアーに変更して実施した。

1. 3. 水俣から学ぶ理由

コロナ禍をめぐっては、全国で差別や偏見の問題が顕在化し、今の子どもたちがこれから優しい社会を創って

いくためには、公害経験から地域の再生に取り組んできた水俣から多くのことが学べるに違いないと考えた。

教材研究する中で、水俣病センター相思社職員永野三智氏の著書(永野, 2018)や講演会より、水俣病が過去の出来事ではなく、現在も症状を抱えながら生きる人がいること、地元の人が地元を語ることは、今日もまだ困難な状況があることを学んだ。そして、水俣に向けられ、水俣の中でも生じた偏見や差別、分断の構図(原田, 1972, 1985, 2007)は、例えば福島原発事故で起きている問題や、コロナ禍で医療従事者や感染者家族へ向けられた差別や偏見など、現在の社会の中にも存在しているため、子どもたちにとっても身近な問題として捉えられるのではないかと考えた。

また、水俣では公害経験からの再生に向けて、様々な取り組みを行っている(例えば吉本, 2008)。具体的には、水俣病が食品を通じて発生したこと、無農薬の茶、柑橘類の栽培など、食の安全や自然環境との関わり方について考えを持って実践している人や、水俣病の語り部として命との向き合い方を伝え続けている人などがある。このように、水俣には、多様な立場で持続可能な地域社会づくりに関わる人が多く存在する。

従って、今日的な社会問題に向き合っていくためには、水俣という場で、水俣のひとと出会うことは、大きな意味を持つのではないかと考えた。

1. 4. 水俣をフィールドとした地域学習の先行事例

大学の授業や演習、ゼミ合宿などで、水俣をフィールドとして大学生が学ぶ例は多く存在する。また、高等学校の実践例としては、例えば安藤ほか(2021)の中で、小川が報告している水俣フィールドワークがある。しかし、中学校が ESD 実践として水俣をフィールドとした実践例は少ない。また、水俣をフィールドとした教育実践の効果に関する先行研究については、生徒の環境意識の変化に焦点をおいた研究(例えば三阪ほか, 2004)や社会認識の形成過程に焦点をおいた研究(小川, 2014)は存在するものの、生徒の価値観や生き方の変容に焦点を当てた研究は稀である。

1. 5. 実践の検証方法

本研究では、事前学習を含めた一連の学習において、生徒に生じた学びや価値観、生き方の変容に焦点を当て、事後アンケートを中心に検証を行う。

2. 実践の概要

本実践は、事前・事後学習を含めると 2021 年 2 月から 10 月まで実施し、本校の 2021 年度第 3 学年 137 名を対象に、総合的な学習の時間を用いて実施した。当初、修学旅行は 2021 年 10 月 5 日～7 日に実施予定であった。

2. 1. 修学旅行の行程

当初予定していた修学旅行の行程は、表 1 のとおりであ

る。熊本県の豊かな自然に親しみ、地震や火山に関する防災学習、水俣での人権・環境学習を実施する予定であった。

表 1 修学旅行の行程

日程	内容
10月5日	午後：益城町地震防災学習 ²⁾
10月6日	午前・午後：水俣コース別学習
10月7日	午前：阿蘇草千里・火山博物館・中岳見学 午後：阿蘇アウトドア体験 (パラグライダー体験、乗馬体験等)

2.2. 本実践の学習過程

本実践の学習過程の概要を表2にまとめた。

表 2 本実践の学習過程の概要

実施日	内容 (時数)	概要
2月25日	事前学習1 (2時間)	ねらい：熊本修学旅行のねらいを知り、熊本に興味を持つ。 ・ねらいの説明 ・旅行日程の説明 ・熊本の地理と見所調べ ・NHK プラタモリの視聴 『「火の国」熊本は「水の国」?』 資料：地図帳、旅行パンフレット
5月6日	事前学習2 (2時間)	ねらい：水俣について知ろう。 ・映像の視聴① 「テレビ熊本 水俣病公式確認65年 ユージン・スミスの妻、アイリーン氏が9月公開の映画への思い語る」 ・映像の視聴② 「ANN NEWS MINAMATA〜ユージン・スミスの遺志〜」 資料：「知る水俣病」朝日新聞
5月12日	事前学習3 (1時間)	ねらい：奈良の歴史や文化と水銀のつながりを理解する。 ・社会科教師から、水銀の利用について歴史的・文化的切り口から説明を行う。
6月4日	オンライン水俣講演会 (2時間)	ねらい： ・水俣病の現状を知り、今も続く水俣病について考える機会にする。 ・永野三智氏からの問いかけに対して、自分なりに考え、もやもや感や問いをもつ。 講演テーマ「水俣について知り、考える」 講師：水俣病センター相思社永野三智氏 資料：水俣病10の知識
7月9日	コース発表 (1時間)	・各コース概要を担当教員から説明する。 ・希望調査を行う
7月20日 8月6日 8月25日	実行委員会 (昼休み) (4時間)	ねらい：学びのキーワードづくりをする。 ・実行委員会を開催し、何を学びたいのか、学習のテーマを生徒が中心となつてつくる。
7月20日 ～8月30日	夏休み水俣レポートの作成 (課題)	ねらい：関心を惹くテーマについて掘り下げ、問いづくりの土台をつくる。 ・関心を惹くテーマについて調べレポートにまとめる。 資料：図解水俣病 水俣病歴史考証館展示図録（水俣病センター相思社）
9月24日 (Eコース：10月15日)	オンライン水俣ツアー (2時間)	ねらい：水俣病が発生した社会構造や、向けられた偏見・差別、それら乗り越えながら現在の水俣を支えている人との出会いや語りから、優しい社会の創り手になるためにはどうすればよいか、今の生き方や価値観を問い直し、これからの生き方につなげていく。 ・A～Eコースで、オンラインで講師とつなぎ、講演を聞く。 ・取り寄せてできるものについては、取り寄せて試食や学習に使う。
9月27日	アイリーン・美緒子・スミス氏講演会 (2時間)	ねらい：映画「MINAMATA」のモデルである、写真家ユージン・スミスの妻であったアイリーン氏から、当時の水俣の様子や現在の水俣への思いなどを語っていただき、自身の生き方や価値観を問い直す。 講演テーマ「アイリーン氏が水俣で考えたこと」 講師：アイリーン・美緒子・スミス

事前学習では、熊本について知ることからはじめ、水俣病の基礎知識や奈良と水銀の歴史などを学習した。

また、今の水俣を知るために、水俣病センター相思社職員の永野三智氏を講師に招き、オンライン水俣講演会を実施した。講演会では、水俣病の概要をはじめ、今の水俣についてや、水俣病患者と関わる中で生じた迷いや葛藤、ご自身の生き方などについても語ってもらう。

7月には、水俣コース別学習のコンセプトが決まり、生徒の実行委員会の立ち上げや、コース分けを行った。なお、8月下旬に、熊本方面での修学旅行の実施が中止されたため、急遽水俣で予定していた水俣コース別学習についてのみ、オンラインで実施することにした。当初の予定では、9月に実行委員の生徒とともにコース内容の詳細な企画や、コースごとに問いづくりなどを行う予定であった。

2.3. 水俣コース別学習のデザイン

表3は、当初予定していた各コースの概要である。

水俣での学習は、今の水俣を多様な切り口から学ぶため、通常学級でA～Dコースを、特別支援学級でEコース

表 3 水俣コース別学習の概要

コース名	概要
A：ディープ水俣コース	多くの水俣病患者が発生した、茂道漁村で今も生活しておられる杉本肇氏と、水俣病センター相思社の永野三智氏の生き方から、これからの優しい社会づくりについて考える。当日は、茂道漁村を訪ね杉本肇氏から自身が受けてきた偏見や差別、それを乗り越えて語り部となった今とこれからについて語っていただく。茂道の海岸で生物の豊かさを学び、「ピナ」を試食する。昼食は、杉本肇氏が、漁で採った魚介の漁師飯をいただく。
B：持続可能な農業と畜産コース	天野氏と農山氏の生き方から、持続可能な農業や畜産を考える。天野氏は、化石燃料を極力使わずに無農薬で茶を栽培、水俣に残る茶の木を増やして、天の製茶園を営んでいる。「茶を育てるには山を育てる」をモットーに、山と茶の木のあり方を追求している。農山氏は、理想的な豚の飼育地を求め、森と地下水の豊かな水俣でモンヴェール農山を営んでいる。「櫓の森づくり」に取り組むことで、飼育環境や地下水、安全にこだわった飼料で豚を飼育している。当日は、農山氏の養豚を見学し豚の加工食品をいただき、天野氏の茶葉で和紅茶づくりとテイスティング体験する。
C：写真家ユージン・スミスの足跡を辿るコース	9月上映開始の映画「MINAMATA」のモデルとなった、写真家ユージン・スミスは、水俣に住んで水俣の写真を撮り続けた戦場カメラマンである。ユージン・スミスが写真で伝えたかったことは何かを、追体験する中で考える。当日は、水俣を撮る、若きプロカメラマンである豊田有希氏や森田具海氏に同行してもらい、その生き方や写真の撮り方を学ぶ。生徒が撮影した写真は、ユージン・スミスの妻であったアイリーン氏に見ていただくコメントをいただく。
D：うたせ船と球磨川流域コース	古くから不知火海の漁業で使われていたエンジン動力のない「うたせ船」。一般の人が乗船できるのは国内唯一で、芦北にしか残っていない。午前にはうたせ船に乗り、釣り体験などをして、船上で海の幸をいただく。海の豊かさの持続可能性について考える。午後からは、豊かな不知火海を支える球磨川を遡り、住民の運動によって取り壊された荒瀬ダムの跡を見学する。先般の水害によって大きな被害を被った跡もめぐり、山と海の繋がりや、その豊かさや人間生活の持続可能性についても考える。
E：よかたい先生ゆかりの人と地をめぐるコース	絵本「よかたい先生」に出てくる川本輝夫氏の息子である、川本愛一郎氏と出会い、百間港で語りを聞く。自身も水俣病の症状を抱えつつ、患者のケアをするためにリハビリの施設を運営している。絵本で出てきたことが、現実にあったことを肌で感じとる。

表4 オンライン水俣ツアー講演内容の概要

コース	講師	講演の内容（筆者が要約）
A・D：ディープ水俣	杉本肇氏	<p>①自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 杉本家の歴史や、無添加のいりこ、柑橘類の無農薬栽培について。 <p>②水俣病について</p> <ul style="list-style-type: none"> 水俣病の原因や、人や動物に起きたこと。 <p>③家族の発病と差別</p> <ul style="list-style-type: none"> 祖母の発病とともに始まった、杉本家への差別。 母親も水俣病であったが、水俣病のつらさよりも差別の方がつらかったと訴えていたこと。 <p>④小学校の時の記憶</p> <ul style="list-style-type: none"> 第一次訴訟の始まりと、祖父の死。両親の入院と、長男として家族を支えた日々。 弱い立場でも勇気を出して声を上げると、人の支援があり、助け合いながら人が人を救っていく歴史が水俣にあった。 <p>⑤第一次訴訟の決着</p> <p>⑥漁師の自然や命と向き合う姿から学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> 母や漁師から、自然に救われたという言葉をよく聞く。 母が恨むことをやめ、あるときチツソを許す、その背景にある県も国も許すと言った。 物事や自然に対して謙虚にならないと魚は捕れないし、そこまで精神を持ていかないといけないのが漁師。 母が、自分を律してくれた水俣病を「のさり」であると表現した。 <p>⑦これからについて</p> <ul style="list-style-type: none"> 漁をやっていきたい。自分だけの話ではなく、他者からも話を聞き、伝えていきたい。 第一次訴訟の家族や今患者として苦しんでいる人、当時の学校の先生とくに話を聞いている。 聞く話の共通点として、水俣の風景が自分を救ってくれたという言葉がよく出てくる。 子どもの時に、水俣病が世界に発信される際は、全部モノクロであり、悲劇だけを伝えることが疑問だった。 各地で講演するが、かつて水俣から発信されたモノクロの映像から発展していない。今の水俣を見て欲しい。 <p>⑧質疑応答</p> <p>⑨水俣の風景をライブ配信</p>
B：持続可能な農業と畜産	天野浩氏 農山春香氏 農山文康氏 永野三智氏	<p><天野氏></p> <p>①自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 天野製茶園「森と種とお茶」というテーマで活動している。環境マイスターにも認定され、循環型農業をしている。 <p>②水でつながる水俣</p> <ul style="list-style-type: none"> 水俣は、山から海までが一つの川の流域で、水の循環が繋がっている。 水俣病の大きな出来事があったときに、水の循環を中心に再生することになった。 <p>③自然の森</p> <ul style="list-style-type: none"> 色々な木が生えているのが元々の山であり、多様な森で安定した森をどう作るかがテーマである。 種から森を育てていて、種子の交換会をしている。地域で穫れるものを使って、森でお茶会をすることもある。 天の製茶園は、種から育てた樹齢100年に近い茶の木で製茶し、紅茶を主につくっている。 <p>④水俣で茶をつくるということ</p> <ul style="list-style-type: none"> 水俣は公害病を経験していて、繰り返さないという思いでつくっている。 経験したことがないことと向き合う地域は、限られた範囲で考えるのではなく、飛び出して考えることが大事。 <p><農山氏></p> <p>⑤自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 水俣市から車で15分ほどの山の中で、養豚、加工から販売及び飲食店経営までを行なっている。 <p>⑥森づくりと養豚</p> <ul style="list-style-type: none"> 「山を育てるために豚を飼う」が、経営理念。 山を手入れし、豚の糞尿を堆肥化して山を育てている。 山を育てるとミネラル豊富な地下水と澄んだ空気が生み出され、養豚で生じるCO₂も吸収してくれる。 <p>⑦天野氏と農山氏の対談</p> <ul style="list-style-type: none"> 新しいことを展開していく「つきぬける」ということについて。 お互いを近くで見えていて真似したいことについて。 今後目指すところについて。 <p>⑧質疑応答</p>
C：写真家ユージン・スミスの足跡を辿る	豊田有希氏	<p>①自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 水俣でドキュメンタリー写真を撮影している。2015年に水俣市に引っ越し、芦北町の黒岩地区に通って取材している。 <p>②写真を初めてから今までの経緯</p> <ul style="list-style-type: none"> 一度は別の道に進みかけたが、独学で写真を始めた。 産業遺産、廃墟が好きで撮影しており、ギャラリーで三人展を行ったが、当時はビジュアル重視で中身がなかった。 いろんな情報や感情を読み取るという、写真を読む感覚を学んだ。 父親の癌をきっかけに、父親の闘病の一年半を撮影し、写真に対する自分の姿勢、本質を考える経験をした。 ドキュメンタリー写真という分野を知り、ネパールで撮影を行うが、 「よその土地の出来事」を撮る意味がわからなくなった。年に数回の訪問では、物事の本質を見られない。 「山間、半数に水俣病症状」という、黒岩地区についての新聞記事と出会った。 黒岩地区に行ったが、水俣からは遠く離れており、第一印象は普通の山間集落で、水俣病と結び付かなかった。 黒岩地区の大半は慢性型水俣病の方々。見た目にはわからないが、話の端々に痛みのことが出てくる。 水俣病を知らない中で、写真を撮ることにごく悩み、「撮られる者の痛み」「撮るという行為の暴力性」を考えた。 相手の思いを自分と重ねることで、写真を撮るのか考えるようになり、撮影を始めて5年目に撮影を許された。 <p>③質疑応答</p>
E：よかたい先生ゆかりの人から話を聞く	川本愛一郎氏	<p>①自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> 父親の紹介。優しいが、悪いことは許さない勇気を持っている。 市の資料館で語り部をしている。作業療法士、言語聴覚士という仕事をしている。 <p>②水俣について</p> <ul style="list-style-type: none"> 海と山などの自然の豊かさ、魚の豊かさ、暮らしについて。 食べることでおこった水俣病について。 水俣病事件を紙芝居（「水俣の紙芝居」絵：永井文明、文：村田浩一）で学ぶ。 <p>③自身の生い立ちと両親について</p> <ul style="list-style-type: none"> 漁師だった祖父は、3年間苦しんで亡くなった。祖父は未認定、父は認定患者、母は医療手帳を持っていた。 4歳から5歳の時に、祖父にしまったことへの後悔が、今の仕事につながっている。 父は、自分と同じ思いをしている人がいないかと、話を聞く活動を始めた。 沢山の苦しんでいる人がいて、差別と偏見を恐れて声を上げられない状態。父は「失って水俣病」と表現した。 父は自主交渉、直接交渉を選び、チツソ工場正門前で座り込みを開始。父は水俣の人たちから大変な批判を浴びた。 父に対する暴力や、家族への脅しや嫌がらせに、なぜ被害者がこんな思いをしないといけないのかと悔しかった。 父を信じて家族みんなで支え合った。父たちの闘いをたくさんの方が支えてくれていることを知った。 父たちの行動が、最後にはチツソを交渉の場に引き出し、補償協定書という形で身をつ結んだ。 父は、文集に「熱意とは事ある毎に意思を表明すること」という言葉を残している。 <p>④質疑応答</p>

スを企画した。

各コースのコンセプトや出会うひとは教師が発案した。各コースのコンセプトや出会うひとについては、水俣病センター相思社の協力を得て、鍵となるひととのつながりを作っていた。コースのコンセプトが決定した時点で、生徒に希望調査を実施し、グループ分けを行った。

2.4. オンライン水俣ツアー

熊本方面の修学旅行が中止されたことを受け、水俣での学びを継続させるため、オンライン水俣ツアーとして学習を組み立て直した。当初、A～E コースあったコースのうち、A と D は講師の関係で統合した。

取り寄せできるものについては、試食や学習に使った。取り寄せたものは、以下の通りである。食品については、ツアー当日の昼食時に、全生徒に配布した。

- ・乾燥ちりめん（杉本氏）
- ・加工加熱のスライスソーセージ（農山氏）
- ・紅茶（天野氏）
- ・写真展図録（豊田氏）

ツアーでは、オンラインで講師とつなぎ、講演を聞いた。各コースの講演の概要を、表4にまとめた。

2.5. アイリーン・美緒子・スミス氏の講演

写真家ユージン・スミスの妻であったアイリーン氏を講師に招き、「アイリーン氏が水俣で考えたこと」をテーマに、全生徒を対象に語ってもらった。

講演前半は、オンラインで各教室を結び、別室から講演を行った。後半は、各教室を回って質疑応答を行った。

講演前半は、ユージンの考える、ジャーナリズムの責任や信念、当時の水俣での生活などの説明がなされた。また、写真集「MINAMATA」の写真を交えながら、写真に込められたエッセンスや、その背景の説明がなされた。

講演後半の質疑応答では、生徒の質問に答えながら、水俣病裁判での経験や、過去の人の頑張りによって今があること、世の中を変えるために中学生だからこそできることについて力を込めて話しをされた。

当日は、テレビ局や新聞社などのマスコミの取材もあり、生徒たちはその空気を感じながら講演を聴き、考えた³⁾。

3. 結果と考察

3.1. 講演で生徒がした質問の分析

オンライン水俣ツアーでは、生徒はコースごとに分かれて講演を聞き、アイリーン氏の講演では、全生徒が同じ講演を聞いた。そこで発せられた生徒の質問から、

表5 生徒の質問内容

講演	生徒がした質問内容
A・D：ディープ水俣	「水俣病の元が、チッソから出ているメチル水銀を体内に含む魚が原因と分かった中で、漁師として魚の売れ行きとかが下がったのか」 「杉本さんは、チッソについてどう思っていますか」 「杉本さんは、今までたくさんの人と対話してこられたと思いますが、その中でこういうのを大切にしてきたという考え方や思いがありますか」
B：持続可能な農業と畜産	「畜産をするのは成功するのも難しいし、大変なこともたくさんあったと思うのですが、嫌だと思ったことはありませんか」 「地域を知ることとは自分を強くすることの意味は」 「水俣の商品を広げていく上で、水俣という忘れてはいけないこととして入れるべき単語。広めると抵抗を感じる人がいると思うが、それを感じたことがあるか。どう伝えているのか詳しく教えて欲しい」 「水俣で活動されていて、本調子になってきたときに熊本地震があった。それによってかわったことはなかったか」
C：写真家ユージン・スミスの足跡を辿る	「写真はどんなことを意識して考えて撮っていますか」 「これからの水俣はどう変わっていくと思いますか」 「水俣の写真を撮っているが、最終的に目指しているのがあるのですか」 「自分に写真を撮る上で自分の価値観がどう変わっていったのか」 「五人くらいで見て気になった写真があった。どんな思いで撮った写真か」 「この手が大きくアップされている写真について、どういう想いや気持ちで込められているのか」 「1枚に収めるという写真の魅力は何」 「写真を撮るときにコミュニケーションをとると思うのですが、そのときに大事にしていることはありますか」 「水俣の写真をたくさん撮っている中で、一番印象に残っている写真についておしえてほしい」
アイリーン・美緒子・スミスさんの講演	「写真を撮る時に断られることがなかったか」 「杉本さんがチッソを許すと言っていたが、アイリーンさんはどう考えているか」 ①「振り手が伝えたいことと、振られる側が伝えたいことに違いがあったか」 ②「モノクロの写真で撮る理由は」 「アイリーンさんは映画化されることをどう思っていますか」 ③「今も水俣病で苦しんでいる方はたくさんいるが、直接的な支援はできないけど私たちにできることというか、こういうことをしてくれると助かるということはあるのか」 「アイリーンさんはチッソに対してどう思っているか」 ④「世の中で間違っていると感じることに気づいた時に、自分たち中学生はどうしたらいいですか」 「写真を撮っていて幸せを感じたことは」 「コロナ禍でいろいろな人が苦しんでいる中で写真を撮ることの意味は」 「ユージンさんが暴力を受けたときやめようと思わなかったか」 「ユージンさんが、水俣に行く前に沖縄戦を体験して大きな怪我をしたそうですが、水俣に行くのを嫌がったりしなかったか」 「昔の水俣と今の水俣を見てどう思ったか」

表6 事後アンケート質問1～4の回答結果

	質問内容	すごく思う	まあまあ思う	どちらとも言えない	あまり思わない	まったく思わない
1	水俣の学習に、積極的に参加して考えることができたと思いますか？	37 (32)	67 (59)	9 (8)	1 (1)	0 (0)
2	水俣で起きた偏見や差別は、身近にも起きている問題だと思いませんか？	39 (34)	47 (41)	19 (17)	9 (8)	0 (0)
3	水俣の学習を通して、自分でも社会を変えることができると思いましたか？	12 (10)	48 (42)	46 (40)	7 (6)	2 (2)
		よくできた	まあまあできた	どちらとも言えない	あまりできていない	まったくできていない
4	水俣のために生きる人の話を聞いて、地域に生きることの意味を考えることができましたか？	37 (32)	57 (50)	16 (14)	5 (4)	0 (0)

※上段の数値は人数を、下段の数値は%を表している。

質問1, 2 (n=114), 質問3, 4 (n=115)

複数の人との出会いによって生じる効果を検討する。Eコースを除く生徒の質問を、表5にまとめた。

下線部①の質問は、Cで講演を聞いた生徒が発した。Cの講演では、豊田氏が「撮られる者の痛み」「撮るという行為の暴力性」について話しており、下線部①を質問した生徒は、豊田氏と同じ写真家であるアイリーン氏に写真を撮るときに考えていることについて質問をした。

下線部②の質問は、A・Dで講演を聞いた生徒が発した。A・Dの講演では、杉本氏が、水俣病が世界に発信される際に、モノクロ写真であったことに疑問を持っていたことを話しており、モノクロ写真で撮影する理由について質問をした。生徒は、立場の違う人がどのような価値観や考え方を持っているか、比べるために質問をした。

また、下線部③、④は、各コースで見られなかった具体的な行動についての質問である。

これらのことから、立場の違う複数の人との出会いは、生徒に新たな問いを生じさせ、価値の違いに触れる有効な機会となったと考える。

3.2. 事後アンケートの分析

事後アンケートは、全ての実践を終えた後に、通常学級の生徒を対象に実施した。

(1) 生徒の実感からの実践の評価

表6に質問1～4の回答結果を示した。

質問1「水俣の学習に、積極的に参加して考えることができたと思いますか？」に対して、91%が肯定的な回答をした。従って、生徒は本実践の学習への参画意識は高かったことが示された。

次に、質問2「水俣で起きた偏見や差別は、身近にも起きている問題だと思いますか？」に対して、75%が肯定的な回答をした。多くの生徒が、身近な問題として自分に引き寄せて、水俣の問題を考えることができたことと推察される。しかし、質問の意味を公害被害による偏見や差別と捉えた生徒も少なからず存在した可能性があり、肯定的な回答の割合がやや少なかったものと考えられる。

次に、質問3「水俣の学習を通して、自分でも社会を変えることができると思いましたか？」に対して、52%が肯定的な回答をした。40%は、「どちらとも言えない」と回答していることから、効果が認められたとは言いがたい。中学生という立場で、具体的に何ができるかという点や社会を変えるイメージが湧かなかったことが要因であると推察される。

次に、質問4「水俣のために生きる人の話を聞いて、地域に生きることを考えることができましたか？」に対して、82%が肯定的な回答をした。これは、様々な立場で地域に暮らす人と出会い、その生き方や語り、地域との向き合い方から学ぶことで、具体的なイメージを掴むことができたのではないかと考える。

(2) 生徒の学習内容の受け止めに関する分析

生徒が学習内容を自分事として受け止めるための要因

について分析するため、質問5「水俣の学習で、自分ごととして受け止められた話や内容がありましたか？」を設定した。表7に、質問5の回答結果を示した。質問5に対して、68%が「ある」と回答した。「ある」と回答した生徒の理由記述には、多様な内容がみられ、以下の5つの項目に大別した。

- ①身近な差別・偏見・問題
- ②真実を見ること
- ③社会のつながり、世代を超えたつながり
- ④行動することの大切さ
- ⑤その他

最も多かったのは、「①身近な差別・偏見・問題」であった。水俣の問題は、生徒にとって日常に存在する差別や偏見と結びつけやすい問題であることが改めて示された。これは、質問2の回答傾向と矛盾しない。

次に、「②真実を見ること」は、その記述内容から、固定概念や先入観で物事を見ることの弊害や、知らないことで起きる差別・偏見への気づきに関する記述である。特に、日頃自分がよく知らないまま物事を判断していたことへの気づきが見られた。また、「③社会のつながり、世代を超えたつながり」は、その記述内容から、社会的な構図や過去の人々の営みと自身のつながりへの気づきが見られた。さらに、「④行動することの大切さ」は、その記述内容から、声を上げることの大切さや行動化することの大切さへの気づきが見られた。これらは、講演した講師の語りから、それぞれの生徒なりの気づきとして現れている。従って、多面的に水俣を知ることによって、多様な気づきが生まれ、特に「②真実を見ること」では、知らない自分への気づきといった、いわゆるメタ認知が促されたのではないかと考える。小川(2019)は、知ることへの「当事者」性の獲得の重要性を指摘しており、まさに生徒が知る「当事者」へと歩みを進めたことを示していると言える。

これらのことから、本実践において、一部の生徒が自分事として学習内容を受け止めることができた要因として、次の点が示唆された。

- ・水俣の学びが、生徒にとって身近にある差別や偏見の問題と繋げて考えやすかったこと。
- ・多様な立場の人の語りから、多面的に物事を知り、知らない自分に気づいたこと。

(3) 生徒の変容に関する分析

自分事化が促され、内発的に行動化するためには、生徒の考え方や生き方の変容が生じる必要があると考える。そこで、質問6「水俣の学習で、今の自分の考え方や生き方で変えていきたいと思う部分がありましたか？」を設定した。表8に、質問6の回答結果を示した。質問6に対して、80%が「ある」と回答した。この結果から、一定程度生徒の考え方や生き方に変容をもたらしたと認められる。

「ある」と回答した生徒の理由記述を、以下の3つに大別した。

表 7 事後アンケート質問 5 の回答結果

質問 5 水俣の学習で、自分ごととして受け止められた話や内容がありましたか？「ある」と答えた人は、内容を具体的に答えてください。					(n=114)
回答	内訳	項目	内容	内訳	記述例
ある	68%	身近な差別・偏見・問題	コロナ、SNS のいじめ、人間間、自分の持つ差別意識	35%	・差別をしてはいけないこと。症状よりも差別のほうが辛かったと聞いたので、水俣病だけでなく、差別はよくないと思った。 ・差別のことで、今でもコロナ差別とかあると思うから、しかも、これからの世の中をつくっていくのは自分たちだと思ふし、自分の考え方や意識の仕方とかで差別とかを減らしていけると思うから。 ・差別意識があったため、水俣病であることを打ち明けられないというのは、私たちそれぞれも抱えていることだと思います。
		真実を見ること	ありのままを見る、良い面も見ると、知らないことで生まれる差別	23%	・目前にある情報を鵜呑みにせずに、真実を追い求めること。その場にいる人にしか分からないことがあること。その人の世界に触れることで、新しいものが見えてくること。先入観で見ずに、ただひたすら見つめていくことが大切であること。 ・水俣病といえば公害といった悪い側面だけを知り、固定概念だけで決めつけるのではなく、良い側面も知っていかないといけないこと。 ・永野さんやアイリーンさんの話でもあったように、水俣病に対してわからないことがあるから差別や偏見がある。だから、伝えられることを多くの人にできるだけ伝えられるようにしようと思った。
		社会のつながり、世代を超えたつながり	過去の恩恵、しわ寄せ、後の世代	14%	・恩恵の話。どれだけそれによって辛い思いをした人がいても、私たちはそのおかげで今、豊かな生活ができていくこと。やはりそこまで自分事として受け止められていないかもしれない。 ・誰かが良いとこどりをして、誰かが犠牲になる、という部分。今の環境問題にもつながると思った。 ・今していることのいいところだけとて、悪いところはもしかしたら後の世代に回しているかもしれないと思った。
		行動することの大切さ	声を上げる、伝える、動く	13%	・勇気のある行動が解決につながるということ。 ・間違っていることには、しっかりと大きな声で気持ちや正しい道を伝えるということ。
		その他	人との関わり方、水俣病の症状、今も続く水俣病など	14%	・永野さんのお話を聞いて、簡単に言葉をかけると相手の気分を害してしまうこともあると知って、きちんと相手の立場になって考えてみるのが大事だと思った。 ・未だに水俣病として認定されず苦しんでいる人がいると聞いたときに、その人たちは私と同じ国民なのに、自由を奪われている気がしてならない。認定されたところで、彼らの身体的自由は戻らないが、少しでも彼らが楽になれるように（楽というのはニュアンスが違うが）、私たちにできることがないか考えたいと思った。
ない	32%	—	—	—	—

表 8 事後アンケート質問 6 の回答結果

質問 6 水俣の学習で、今の自分の考え方や生き方で変えていきたいと思う部分がありましたか？「ある」と答えた人は理由を答えてください。					(n=114)
回答	内訳	変容のフェーズ	内容	内訳	記述例
ある	80%	知る	偏見・差別はいけない、多面的に知る、深く知る、常識を疑う	53%	・1つの意見や考えだけを信じたり、表に出ることだけを信じないようにしないといけないと思った。真実がどうも分からないものを広めないようにしないといけないと思った。 ・誰かの話を聞くだけで満足するだけでなく、ありのままのことについてしっかり見るということは大切なことだと思ったから。情報を受けていれば大丈夫だと思うところが私にはあったから。 ・良い思いをする人、犠牲になる人の両方があることを、当たり前と思わない。
		他人事ではない気づき	他人事→自分事、自分と過去・未来とのつながり	11%	・いろんな病や差別にあっている人のことを知っていても、他人事で流しがちになってしまうところ。 ・後の世代が苦しまないように、自分の行動のせいで不平な人がいなくなればならないと思った。
		自分の生き方・他者との関わり	姿勢、伝える、他者との関わり方	36%	・「何もできない」「分からない」ではなく、「何ができるか」と積極的に考えていくべきだと思った。受動的な考えから、能動的な考えに切り替えたい。 ・これから伝える側になっていくので、相手にどうやって伝わるかということを考えるのが大事だと思った。 ・恨むという対立的な立場を取らず、歩み寄るという意見は、決して水俣病だけでなく、友達など人との関わり方に大きく関わると思うから。 ・私は結構色々なものに対して偏見をもったり、相手はこう思っているだろうと極端に考えてしまったりするので、少しずつなおしていきたいと思った。でも、まだまだどうなおせばいいのかわからないので、人との関わりから新しい考えを見出していきたい。
ない	20%	—	—	—	—

- ①知る
- ②他人事ではない気づき
- ③自分の生き方・他者との関わり

「①知る」には、物事を一面で捉えるのではなく、多面的に捉え、深く知ることに関する内容が見られた。これは、知らない自分への気づきを省察し、変えていこうとする内容になっている。

次に、「②他人事ではない気づき」には、自身の行動の他者への影響を時間的・空間的に広く捉え始めている内容や、他人事になっている自分への客観的気づきの内容が見られた。これは、「①知る」と比較すると、自己だけではなく他者との関係性の中で省察し、変えていこうとする内容になっている。

さらに、「③自分の生き方・他者との関わり」には、具体的に自分にできることを模索する内容や、人との関わり方を変えようとする内容、自分を客観視して変容を図ろうとする内容が見られた。これは、「①知る」や「②他人事ではない気づき」と比較すると、変えていこうと

する内容がより具体的になっている。従って、①～③は、自分事化から内発的に行動化するまでのフェーズとして見ることができる。

これらの結果から、多くの生徒が本実践の学びによって、自分の考え方や生き方を変えようとするレベルで自分事化が図られたと考える。しかし、具体的な行動化の入り口に立てた生徒は一部にとどまっていると言える。

(4) 質問 5 と質問 6 の回答傾向の分析

質問 5、6 の回答傾向から、自分事として受け止めることと、行動化との関連を検討するために、質問 5、6 の回答結果を表 9 にまとめた。

表 9 質問 5、6 の回答結果 (人数) n=115		
質問 6 \ 質問 5	ある	ない
ある	69	8
ない	22	16

Fisher の正確確率検定を用いて検定を行ったところ、質問 5、6 で「ある」と答えた生徒と「ない」と答えた生徒の数に有意差が認められた ($p=.000$, $df=1$)。検定の結果から、自分事として受け止められた生徒が、行動化に関して具体的に述べる事ができている傾向が示された。なお、この検定は、フリーソフト R (ver.3.6.0) を用いて行った。

3.3. 実践の学びの評価

ここで、菊地 (2020) を参考に、本実践の学びを評価する。菊地は、「他人事⇌自分事」の学びを 5 つのフェーズ (表 10) で捉え、これらはフェーズ I を中心に据えて、同心円状に捉えられると述べている。

表 10 「他人事⇌自分事」の学びの 5 つのフェーズ

フェーズ	内容
I	「他人」と「自分」は同じ人間であるが、異者として尊敬の念を持って受容する。
II	「他人事」と「自分事」という「出来事」を、偶然性の中で互いに重ねる経験をする。
III	「切実さ」の次元で、他者と出会う。分かったつもりで済ませない。
IV	「他人事」や「自分事」の背景にある構造にまで踏み込む。「他人事」ではないことへの気づき。
V	伝え、動くことで「自分事」として気づいたことを「他人事」へと転換する。

※菊地 (2020) を参考に筆者の解釈で改変

本実践をこの 5 つのフェーズで捉え直してみると、特にフェーズ V の「他人事」への転換の機会が設定されていないことが課題としてあげられる。具体的には、オンライン水俣ツアーはコースに分かれて実施しているため、各コースで学んだことや考えたことをシェアすることができていない。考えを言語化して他者に伝える経験や、出会う人によって価値観や生き方が違うこと、同じ話を聞いても違う考えを持つことなどへの気づきがなければ、価値観のすり合わせや問題の背景に深く迫ることはできない。

従って、質問 6 で、具体的な行動化の入り口に立てた生徒が一部に留まったことや、20% の生徒が変容を自覚できなかったことは、各コースの学びをシェアする機会がなかったことに一因があると推察される。

4. まとめと今後の課題

本研究の実践では、ひととの出会いがオンラインになり、現地での学習も叶わなかった。しかし、講演で生徒がした質問の分析からは、立場の違う複数のひととの出会いが、生徒に新たな問いを生じさせ、価値の違いに触れる有効な機会となったことが示された。これは、同時に複数のコースで学習を進めることや、短期間に複数のひとと出会うことが可能となったためであり、オンライン環境ならではの成果であると言える。

また、事後アンケートの結果、生徒の学習への参画意識が高かったことや、本実践が生徒に地域に生きるものの意味について具体的にイメージさせることに寄与したことが示された。

さらに、生徒の学習内容の受け止めに関する分析からは、68% の生徒が自分事として学習内容を受け止めたことが示され、その要因として「①水俣の学びが、身近に存在する差別や偏見の問題と繋げて考えやすかったこと。」と「②多様な立場の人の語りから、多面的に物事を知り、知らない自分に気づいたこと。」の 2 点が明らかとなった。

最後に、生徒の変容に関する分析からは、80% の生徒が、自分の考え方や生き方に変容があったと答えており、価値観の変容や生き方の変容をもたらしたことが認められた。そして、多くの生徒が、自分の考え方や生き方を変えようとするレベルで自分事化を図り、自分事として学習内容を受け止められた生徒ほど、自分の考え方や生き方を変えようとするレベルで自分事化が図られる傾向が認められた。

従って、本実践は、生徒の価値変容を生じさせ、自分事として考えることを通して、自らの生き方の問い直しに一定寄与したと考える。

しかし、課題として、自分に何ができるかといった行動化につながる問いに対する答えを言語化できた生徒は一部にとどまった。これは、各コースで学んだことや考えたことをシェアする機会の設定ができていなかったことが一因であると推察される。

また、本研究の実践では、現地を訪問できなかったことによって、水俣をランドスケープの見方で見ることができず、出会う人と空間を共有できなかったことも課題である。菊地はフェーズ II において、出来事を重ねられる空間の必要性を指摘している。場の持つ臨場感や物との対話、水俣に生きる人の視線で物事を見る経験ができなかったことは悔やまれる点である。

今後、ESD 地域学習として確立していくためには、現地でのフィールドワークを実施した上での検証が必要である。

謝辞

水俣病センター相思社の永野三智氏をはじめとした職員の皆様には、今回の修学旅行の企画で多大な支援をしていただいた。また、杉本肇氏、天野浩氏、農山春香氏、農山文康氏、豊田有希氏、川本愛一郎氏には、オンライン水俣ツアーで講演をしていただいた。記して感謝申し上げる。

注

1) 本研究では、佐竹 (2021) で導入したランドスケ

プの見方を取り入れた。

Ye (2010) はヨーロッパのランドスケープの形成過程を、「自然的要素と人文的要素とが相互作用の結果としてランドスケープが形成され、そのランドスケープはさらに次世代の人々の認識と評価基準で相互作用し、結果として新たなランドスケープが形成される歴史のプロセスである」と説明している。つまり、ランドスケープには、過去から現在までの自然と人の営みの履歴が内包されており、ランドスケープを読み解くことは、過去の人々と自然の関わり方や創造されてきた価値、人々の想いに目を向けることであると解釈できる。

従って、ランドスケープの見方を地域学習に取り入れることは、多様な価値観や見方で地域を捉えることを可能とし、自ら地域の価値を掘り起こすことにつながるのではないかと考えて取り入れた。

なお、生徒は第1学年時に、奈良県立大学井原縁教授による、ランドスケープワークショップを受講し、ランドスケープの見方について学んでいる。

- 2) 益城町地震防災学習は、2016年の熊本地震の教訓を学ぶため、断層の現地観察や旧東海大学阿蘇キャンパス内の震災遺構の見学などを行う学習である。防災意識を高めることをねらいとして設定した学習である。熊本県観光連盟を通じて依頼した。
- 3) 奈良テレビ放送が取材し、9月28日の「ゆうドキッ!」で放送された。奈良テレビのニュースサイト「ナラトワ」にアップロードされた (<https://nordot.app/815529955268722688?c=476913576246887521>)。また、朝日新聞 2021 年 9 月 28 日朝刊、読売新聞 2021 年 9 月 29 日朝刊の奈良県版に、生徒のインタビューも含めて記事が掲載された。

参考文献

- 安藤聡彦, 林美帆, 丹野春香 (2021), 公害スタディーズ, ころから
- 小川輝光 (2014), 「高校生の社会認識形成に関する質的研究－総合学習と現地研修を活用した水俣病学習のレポート分析を事例に－」, 社会科教育研究, No.121, pp.1-13
- 小川輝光 (2019), 3.11 後の水俣 /MINAMATA, 清水書院
- 菊地栄治 (2020), 他人事≠自分事 教育と社会の根本課題を読み解く, 東信堂
- 河本大地, 吉田寛, 中谷佳子, 河原和之 (2021), 「COVID-19 (新型コロナウイルス感染症) 禍をふまえた地域学習の在り方を考える－オンラインシンポジウムの開催経験から－」, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 第7号, pp.177-188
- 佐竹靖 (2021), 「ランドスケープを軸とした新たな ESD 地域学習の創造－奈良公園ランドスケープコースの実践を通して－」, 奈良教育大学附属中学校研究紀要, 49, pp.65-70
- 永野三智 (2018), みなやつの思いで坂をのぼる 水俣病患者相談のいま, ころから
- 原田正純 (1972), 水俣病, 岩波新書
- 原田正純 (1985), 水俣病は終わっていない, 岩波新書
- 原田正純 (2007), 豊かさと棄民たち 水俣学事始め, 岩波書店
- 三阪和弘, 小池俊雄 (2004), 「中学生の環境意識変化に関する一考察－水俣体験学習会のケーススタディ－」, 環境教育, Vol.14-1, pp.22-33
- 奈良教育大学 ESD 書籍編集委員会 (2021), 学校教育における SDGs・ESD の理論と実践, 協同出版
- Ye Kyungrock (2010), 「欧州ランドスケープ条約の社会的意義とランドスケープの定義」, 日本都市計画学会 都市計画報告集, no.9, pp.48-51.
- 吉田寛, 市橋由彬ほか (2020), 「「ひとに会う」を通して学ぶ ESD の価値実現の教育実践の構想 II－ESD の価値観の根っこに迫る「総合的な学習の時間」の具体化に向けて－」, 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要, 第6号, pp.257-264
- 吉本哲郎 (2008), 地元学をはじめよう, 岩波書店

